慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済的史観論の価値（七完）
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.12 (1919. 12) ,p.1637(101)- 1643(107)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191201-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を比較的に稀少ならしむるに依りて自己の勤務若くは生産物の市價を高めんとする總ての行爲を避くること、等なりとす。

却說社會の目的に關する問題は各時代に於て其形體を新にするものなれども、併し其總ての根底に横はる根本原則は常に同一なるものにして、進歩は人性中の最强にして單に最高尙なるのみに止まらざる力が社會の利益增進の爲めに利用せられ得る範圍程度に職由すと謂ふものは即ち是れなりとす。而かも此根本原則は眞に社會の利益たるものは何ぞやとの問に關し若干の疑惑存在するの故を其基礎を害はるゝものにあらざるなり。何となれば社會の利益が人間の才能を健全活潑に行使し發達せしめて一方に自尊自重の心を養ふと共に他方に於ては希望の光明に支持せられて生氣ある幸福を生む點に主として存在するは衆論の結局に於て歸着する所たればなり。然れば吾人は眞の理解を有する人々の同情と評價との溫き息に俟ちて美はしき仕事と清新なる創意とを撫育せざる可からず。吾人は消費者を强むると共に消費の爲めに備ふる人々の最善の資質を喚起するが如き徑路に消費を轉せしめざる可からず。吾人は幾多の仕事中には貴からずして然かも爲されざる可からざるものあるを認めて之を狹小なる範圍に制限せんが爲めと、其の自體に於て既に劣等たるを免れざる有らゆる生活條件を根絶せんが爲めとに不斷に增大し行く知識と物質的資源とを適用せんと努めざる可からざるなり。吾人の生活條件は、吾人が其を形つくると同樣また吾人を形つくるものなる其一方に於て吾人自身は急速に變化し能はざるものなれば、遽かに多大なる改良を加へられ得可きものにあらざれども、併し吾人は高尙なる生活を營み得可き機會の總ての人に開かれある彼の遙かなる目標を目指して撓まず倦まずに押し進まざる可からざるなり。

經濟的史觀論の價値（七完）

野村兼太郎

九

然らば吾人が以上述べ來れる自由意思的理性的世界に於ける經濟的物的方面は如何。吾人が理性的判斷を下すに當つて如何にするとも物質的考慮を全然度外視すること能はず。殊に「自己保存」のみを念とする時は著しく重要視さる。これ依然として經濟的史觀論が他のあらゆる史觀論以上に强調さるゝ所以なり。然れども吾人が理性的判斷をなすは單に生存のみを念として利害を判斷するものにあらず。換言すれば「自己保存」を脫却せる、否時に相矛盾せる「自己主張」の精神を有するなり。

吾人々類は單獨に生存するものにあらずして社會を形成し其の一員たる以上、其の社會全般に對して一種の義務觀念を生ず。そが所謂共同責任 Solidarite の觀念たると否とを問はず、社會的罪惡を忌避する所謂良心なるもの存在すること疑ふべからず。其の起源を「自己保存」若しくは「自己主張」に求めてこゝに唯物的倫理說を論じ得ざるにあらず。然れども余は尙ほ斯如き發生學的事物を觀察する危險を知り、且つ幾分の疑問を有するが故に輕々に斷じ去ることを欲せず。故にこゝにては斯如き道德的善惡の判斷が先天的に存在し、カントと共に「わが內に存する道德律」を認識し得れば足れり。唯吾人の善と見るもの時に必ずしも社會多數の善と見る所と一致せざることあり。然れども吾人が社會に生存するは少くとも吾人の自己保存が社會に

全ふすることを得るを以つてなり。故に多數の自己保存を損ずるものは先づ惡なりと判斷せざるべからず。此の點より見てのみ所謂大數觀察の是なることを肯定し得ざるにあらず。されど少數の善と見る所必ず否なるにあらず。否寧ろ衆愚の多數は惡なること多し。こゝに於て吾人の道德的判斷は單なる數量に依らずして、各人個々の內的道德律に從はざるべからず。余は此の點に於て「自己主張」と「自己保存」との間に一の矛盾點を發見せざるを得ず。こゝに於てか前述せる道德的に疚しと思ふ行爲をなさゞるは「自己主張」の一方面となり、これをなして「自己保存」を全ふするも「自己主張」を傷け快しとせざるなり。

人類全體が自己保存のみを目的とする時は理性的判斷に於ても其の標準とする所は先づ物質的滿足にあり。如何にせばよりよき家屋に住し、よりよき衣を着し、よりよき食物を取り得るや。所謂經濟學上の最小費用を以つて最大利用を得んとするのみなるべし。然るに吾人は自己を主張せんとす。自己の意思自己の善と信ずる所を何等かの形式に於て、假令消極的になりとも是を維持せんと欲する念慮あり。基督が十字架上に自己の生命を投げ棄てゝ惜まざるは、基督自身の信ずる所を主張せんと欲すればなり。社會の多數に反して「自己保存」を沒却して「自己主張」に生きんと欲すればなり。此の點に於て匹夫と雖も其の志を奪ふべからざるなり。時に斯如き少數者の內に所謂頑迷の徒無きにあらず。然れども其の先見者たると果た頑迷者たるとを問はず、兎に角當時の社會に於ける異分子たることは同一なり。然るに社會は多數の自己保存を全ふするために存す、故に其の先見者たると頑迷者たるとに論なく、是が生命を剝脫して善となす。其の先見者たると頑迷者たるとの區別は誰かよく是を辯ぜんや。唯後世の批判を待つのみ。

經濟的史觀論が多くの史觀論中最も有力なる所以は所謂社會の使命が斯如き多數の自己保存を目的とするが故なり。故に所謂マルクスの階級爭鬪は如何にして起るやと云ふに、多數者の利益を少數者が獨占するが故にあらずや。暫く勞働者の云ふ所を聞け。吾人多數者の利益を私有財產制度の下にあつて少數の資本家是れを獨占せり。宜敷く公平に分配し吾人勞働者も亦生きざるべからずと。然るに又現今社會主義者が攻擊して止まざる資本主義は近き過去に於ては少數者利益を壟斷せる貴族主義に對する反抗なりしなり。若しそれ一世に先立ちて生產手段の共有を唱へたらんか、識者は其の愚を嘲り笑ふべし。是を强調したらんか其の生は斷たれしならん。すべて社會は多數の賢者若しくは愚者に依つて支配さるゝ限り、其の背景として經濟的色彩は極めて强調さる。唯よく未來を洞見するに天才ありて自己の主張を論ずる時、其の天才の意思と勇氣はよく自己保存の本能に勝ちて遂に奪ふべからざる精神的威力を發揮す。ルーテルの思想の勝利は單にルーテルが天才にのみ依れるにあらず、若しルーテルにして時機未だ來たらざる時に其の意見を吐露したらんには、かの花々しき勝利は得られざりしなるべし。

經濟的史觀論は偉人の價値を無視するにあらず。唯偉人にして世に花々しき名聲を博する者のみ必ずしも眞の偉人にあらず。幸に其の志をなしたる者は、すでに大部分の人心裡に其の偉人と略々同樣なる或ひは似たる思想が、無意識的若しくは有意識的に存在せる際に、唱へたる者なり。故に人類の精神的價値は單に成功せる

偉人のみに限るべからず、隱れたる埋沒せる前驅者の少からざる努力にも其の一部を歸せざるべからず。

「自己保存」と「自己主張」との衝突は暫々極めて日常些細の事實によりて起ることあり。されど斯如きは多く本能的衝動的行動に多し。例へば嫉妬の情に耐へずして發する者、群集心理的感情に盲動する者等往々にして自己を沒却することあり。然し乍ら眞に精神的價値ありとせらるゝは斯如き方面の行動にあらず。吾人が自己の內的道德律に依り善と信じ、自由意思に依りて文化價値に貢獻ありとなす途に進むに當り、多數者の妨害を意とせずして、自己保存の本能を棄てゝ自己を主張する者の行動を目して偉なりとなすなり。

若しそれゴルテル Hermann Gorter の如き論者の道德律は階級爭鬪の爲に、階級關係の爲に、即ち生產關係、生產技術の爲に變化するものなりとするは余の組し難き所なりとす。即ち社會主義的社會に對する勞働者の欲求旺盛となり、其の平和的生活の豫想明瞭となる時、彼等の道德的熱情强烈となるべしと。而して斯如き社會主義的社會を欲求するに至りしは、勞働者が雇主に對して犧牲の道德を守らば、遂に自己保存を全ふし得ざるが故なりと。然らば自己の生命を持續し妻子を窮乏たらしめざれば彼等は滿足するや。換言すれば彼等の「自己保存」をのみ充實せしむれば足れりとするや。翻つて今日の勞働問題を見る。彼等は自己保存のみにて滿足せりや。否彼等も人間としてより高き文化に進まんとして努力する「自己主張」の方面をも、有產階級のそれの如く滿足せしめんと欲するにあらずや。若しそれ社會主義的新社會にして單に萬人の「自己保存」を完成せんに止まらんか、恐らく多數勞働者の滿足する所にあらざるべし。

勿論すべての爭鬪は「自己保存」の問題に接して最も激烈に惹起さるゝを常とす。即ち其の「自己の保存」のために忠實、公正、勇氣、犧牲等の諸德を充分に發揮し得る者は、又よく「自己保存」に適切なる自己階級のために是等の諸德を發揮すべし、斯く考ふるはすでに先天的に忠實、公正等の諸德を豫想するものなれど暫くこれを論せずとするも、唯此の點より見る時は資本家が資本家階級のために、「自己保存」のために力爭すると、勞働者が勞働者階級のために、「自己保存」のために呼號すると何れを是とし何れを非とすべきや惑はざるを得ず。それ自己保存の本能のみよりして爭鬪するに止まらば、恰も獅子と虎と荒野に餌を爭ふに似て、何れに組すべきやを知らず。唯經濟的利益に從ひて何れにか組せんのみ。然らば吾人の文化に寄與する處少し、吾人は此の點より見るもすでに先天的に何等かの道德律を豫想す。すでにゴルテルも云ふ紳士閥と雖も其の本性上、少からざる社會的感情を有すれども、實際政治に當るに及んで紳士閥諸階級の自衞の爲、必然的に其の道德性を壓殺すと。(1) 斯く一方道德性を自己保存のために壓殺するを不可と稱し、他方道德的精神は自己保存の必要より生ずる階級認識に依りて生ずると云ふは滑稽なる矛盾にあらずや。資本家階級に於て不道德なることは、又勞働者階級に於ても不道德なり、然るに一方の自己保存のための鬪爭を是認し、他方の自己保存を否認するは、單なる自己保存以上のあるものを認むるが故にあらざるか。此の點より見るも人類は單に自己保存にのみ齷齪たるに止らず、更により高き目標に對して自己を主張する者なりと思惟す。故にすでに第七節に述べたるが如く、現今に於け

る資本主義的社會組織を覆して、社會主義的社會組織を樹立することが是認さるゝには、後者が前者よりもよりよき社會組織にして、よりよく文化價値の發現に貢獻あることを認識せられざるべからず。

（註一）Hermann Gorter:—Der Historische Materialismus.（堺利彦氏譯本に據れり。）

一〇

余はこゝに本論文を完了せんと欲す。吾人はマルクスの所說を眺め、或種の唯物論者の誇大なることを知れり。然れども凡そ人類の歷史中其の根本に極めて有力なるは經濟的要素なること論なし。

如何なる人類も自己を愛せざる者なく、かゝる自愛に「自己保存」と「自己主張」の二方面存し。そが「自己保存」を偏愛する時は本能的衝動生活たると理性的自由意思の生活たるを問はず經濟的要素は極めて强調せられ、唯「自己保存」と「自己主張」が相矛盾撞着する時に、後者の力說が精神的要素の强大なるを意識せしむるなり

斯如く經濟的要素が人生全般に對して强大なる力を有するが故に、生產手段の進化は社會全般の進化發展を期待し、社會組織の改造は生產手段の如何に依つて左右さる。

唯吾人の精神的要素は、時に是等の生產手段と沒交涉に一向に文化價値實現のために努力することあり。此の種の「自己主張」は遂に經濟的要素、換言すれば社會の多數者の力を以つてすると雖も如何ともなし能はざるなり。これ精神的要素の最大なる强味なりとす。

然乍ら人類發展の歷史は生產手段の如何に依つて自然科學的因果律に依つてのみ形成さるゝものにあらず。文化價値を實現せんとする目的論的考察に依つて、觀察され、又これに依つて其の經濟的發展も精神的發展も是正さるべく、こゝに道德律の存在を認識し、歷史上の偉人を渴仰するに至るなり。

斯して本論文の當初の目的たる經濟的史觀論の價値、即ちこれと文化價値との關係如何に關して、略々論究せりと信ず。

飜つて本論文を起草せる時を思ふに、すでに數ヶ月を閲みし、徒らに冗漫の議論を弄し說かるべき要點を逸し去れること多きを恐る。唯余一個として見れば、余自身が經濟史的研究の態度を明確にし、整頓し、多樣多端なる社會事象を研究する理論的根據を幾分なりとも把捉し得たる點に就て、必ずしも徒勞ならざりしことゝ信ず。唯他日再び此の種の研究に充分なる是正を加へて、足らざるを補足するの機あらんことを期す。

（一九一九年一〇月一九日稿了）

同盟罷工の原因に關する疑問（下）

根本清六

三

今、その意見を簡單に紹介すれば、先つ『要之、若し一部論者の言の如く、賃銀算定法にして其土地、其時に於ける物價の昂騰率に比例するを以て、其必要條件なりと假定せば、昨年十二月中一般賃銀は大體次の如き引上をなすを以て妥當とし』云々とあれ共、吾人の第一に疑問とするは昂騰率に比例し云々とありて、その反對なる低落率に比例し云々を度外視することなり、これに關しては後に詳述するも、所謂一部論者なるものゝ說は甚しき偏見なりと云はざる可からず、更に『大正七年十二月中妥當賃銀の算定法』と題して『即ち三割五分の値上となすを